

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Introduction

探究学習の「やらされ感」はなぜ生まれるのか。どうすれば自分事化するのか

探究学習における課題の1つが、生徒、教師の「やらされ感」

現行の学習指導要領では、「総合的な探究の時間」が設けられ、高校現場には探究学習の実践が蓄積されてきたが、自校の取り組みに対して課題や見直しの必要性を感じている学校も少なくない。課題として多く挙げられるのが、生徒や教師が探究学習に対して「やらされ感」を抱いているということだ（図）。実際、次のような声を現場から聞くことは多い。

「生徒に『本校の探究学習では地域課題に取り組みます』と説明すると、生徒は小・中学校でも地域に関する調べ学習に取り組んできたため、『またか……』といった表情になる」
「探究学習に取り組む意義を理解していないため、教科学習に比べて明らかにモチベーションが低い生徒がいる」

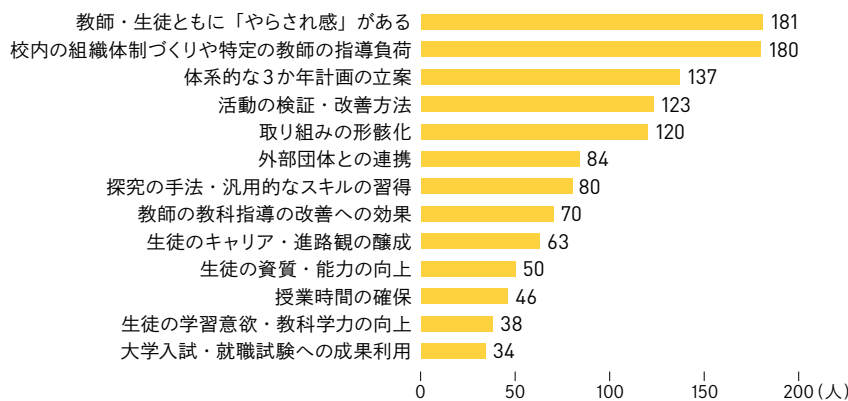
「教師の中にも、何のために探究学習に取り組ませているのかが分かっておらず、腑に落ちていない様子の者も少なくない」
「やりがいよりも、指導の負担感や指導法の迷

いの方が大きいと感じている同僚がいる」

生徒の探究学習に伴走する教師への支援や、探究学習のカリキュラムづくりのサポートなどに携わるカタリバの横山和毅氏は、生徒が探究学習を自分事化することができるようになるためには、自分との「距離」が近い課題を設定することが重要だと指摘する。

「探究学習で設定する課題は、社会で注目されている課題でなければならぬということはありません。生徒自身が『私にとって重要な』と思えることが大切なのです。ただ、課題の設定の段階になって、『これが本当に自分が探究したい課題なのだろうか』と迷ったり、『些細なことに自分がとらわれているだけではないだろうか』と不安になったりして、課題を設定できない生徒もいます。教師が生徒の思いを聞き、『自分の好きなことや興味があること、モヤモヤすることや怒りを感じることであれば、課題として設定することができる可能性はあるよ』と、生徒の背中を押すことが求められます」
生徒が探究学習を自分事化するためには、探究のサイクルが回った後の振り返りも重要だ。

図 「総合的な探究の時間」で課題に感じていること



※ 2024年ベネッセコーポレーション「管理職先生・探究ご担当先生と考える『探究を軌道に乗せるには』」セミナー申し込み時アンケートより。315人が回答。複数回答。



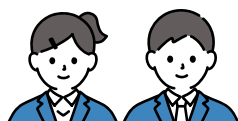
認定特定
非営利活動法人
カタリバ
横山和毅
よこやま・まさき

福島県立ふたば未来学園中学校・高校にて学校支援統括コーディネーターとして活動。2011年カタリバ入職。対話型キャリア学習授業「カタリ場」の事業リーダーや東北拠点で実践型探究学習「マイプロジェクト」の伴走などに従事。

※プロフィールは、2025年3月時点のものです。

どうすれば探究学習が自分事化するのか

生徒



私の

好きなこと、
興味があること

私の

モヤモヤすること、
怒りを感じる事

探究学習の課題は、好きなことから、あるいはモヤモヤすることから考えてもよい。重要なのは、設定した課題が生徒にとって「私の課題」と思えるような、自分との距離が近いものであることだ。

※横山氏への取材を基に編集部で作成。

教師



STEP 1

自校の生徒にどのような資質・能力を育成したいかを考える

STEP 2

その実現のために、カリキュラムをどう見直すかを考える

STEP 3

さらに、自由度の高い「総合的な探究の時間」をどのように設計するかを考える

「総合的な探究の時間」の設計を考える前提として、育成を目指す生徒像の確認と、その実現のためのカリキュラムの見直しを行う。その上で、自由度の高い探究学習でどのような教育活動を行うとよいかを考える。

「探究学習の振り返りでは、『課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現』という探究の各プロセスでの成果や課題に焦点が当てられることが多いようです。それだけでなく、探究してきた課題と自分との距離感が、探究のプロセスの中でどう変わったかを振り返ること、次の探究のサイクルに向けた課題の設定における視点が育まれます。高校3年間で探究のサイクルを何度も回すことで、生徒は「私にとって重要だ」と思える、課題の見つけ方を習得することができ、課題設定力も高まります」

探究学習のあり方を、育成を目指す資質・能力から考える

教科学習とは異なり、教科書や「こうすれば必ずうまくいく」といったマニュアルもない探究学習の指導・支援を、教師が自分事化していくのは当然だと、横山氏は語る。

「カタリバでは、探究学習のカリキュラム開発研修『探究スタートアップラボ』（写真）を実施しています。半年間にわたる対面・オンライン研修を通じて参加者は、自校の探究学習のあり方を考えたり、生徒の探究学習に伴走するポイントについて学んだりします」

1校あたりの参加者数を3人程度（管理職を含む）としているのは、研修での学びを学校に持ち帰り、校内に波及しやすくするためだ。

「『探究スタートアップラボ』では、自校の生

徒にどのような資質・能力を育成したいかをまずは考えます。そして、その実現のために探究学習のカリキュラムをどう見直すか、学校の実態に合わせて自由に設計することができると探究学習において、自校は何を目指すのかを考えます。校内で探究学習について検討する際も、探究学習のカリキュラムの議論からではなく、学校として育成を目指す資質・能力の確認から行うとよいでしょう」

また、探究学習を通して成長した生徒を職員会議などで紹介するようになると、「そんな生徒を自分も育てたい」と、教師における探究学習の自分事化が進むと、横山氏は説明した。



写真 24年度は13校、40人の教師が参加した。

●「探究スタートアップラボ」のこれまでの研修レポート

https://myprojects.jp/article/report/startuplab_2024_report_01/
https://myprojects.jp/article/report/startuplab_2024_report_02/

Turning Point

ルーブリックと
グランドデザインの
策定

探究学習が生徒の資質・能力を育む 重要な教育活動であることを 教師間で共通理解 和歌山県立向陽高校

教師の 転換点

- 探究学習と教科学習の関係を、ルーブリックとグランドデザインで明示
- 生徒の探究学習を体験するような対話型の校内研修を実施

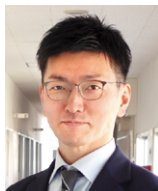
探究学習と教科の授業で 総合的に資質・能力を育む

スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の4期目を迎えた和歌山県立向陽高校では、すべての生徒が課題探究活動「KOYプロジェクト」に取り組んでいる。探究学習への理解を支える土台が、他校の事例を基にして2022年に作成した「IMAWARA（イマワラ）3マスタールーブリック」（図）だ。同校では、生徒への育成を目指す資質・能力として、「気づく力（K）」「起こす力（O）」「読む力（Y）」「教える力（O）」の4つを設定し、ルーブリックを作成。それを基に、課題探究活動と教科・科目ごとのルーブリックを作成した。

「育成を目指す資質・能力は、探究学習と教科学習で一貫している必要があります。それがルーブリックを作成することで実現しました」（SSH推進部長・谷地祐介先生）
23年にはグランドデザインを策定し、学校全体の教育活動の中での探究学習の位置づけを明確化。4つの資質・能力は探究学習と教科学習を連携させながら育成するものであるという共通理解が教師間でさらに進んだ。
「各教科の授業でも、生徒が自ら問いを立てたり、課題を発見したり、協働して問題解決に取り組んだりするなど、授業改善が進んでいます。さらに、教科等横断型授業の実践も見られるようになりました。そのようにして各教科の授業で育んだ資質・能力を総合的に発揮する場

学校概要

設立 1915（大正4）年
形態 普通科、環境科学科／共学
生徒数（高校） 1学年約300人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、大阪公立大などに176人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ613人が合格。



山中資基 やまなか もとき
和歌山県立向陽高校
進路指導部長
同校に赴任して12年目。理科（物理）。



谷地祐介 たにじ ゆうすけ
和歌山県立向陽高校
SSH推進部長
同校に赴任して8年目。理科（化学）。

※プロフィールは、2025年3月時点のものです。

■ HIMAWARI ～ KOYO-3S マスタールーブリック～

同校では、生徒への育成を目指す資質・能力として、「気づく力(K)」「起こす力(O)」「読む力(Y)」「教え合う力(O)」を設定し、マスタールーブリックを策定した。4つの資質・能力は、すべての教育活動を通じて育成を目指すものであるため、マスタールーブリックを基に、課題探究活動と各教科・科目の授業のルーブリックを作成し、運用している。

※学校資料をそのまま掲載。

3S (トリプルS)		Seed 【種】	Sprout 【新芽】	Sunflower 【花】	点 数
					
KOYOの力 (育成する資質・能力)					
Kizuku ～気づく力～	① 向上心 (探究心)	基礎・基本の知識・技能を獲得した。	学んだことと、教科の既習内容との関係やつながりに気づいた。	学んだことと、他教科の内容や実生活の内容などとの関係やつながりに気づいた。	／3
	② 課題発見力	授業内容を把握し、疑問に気づいた。	気づいた疑問から課題を設定し、その解決に向けて取り組んだ。	解決に向けて取り組む過程で新たな疑問に気づき、独自の視点で課題を再設定した。	／3
Okosu ～起こす力～	③ 言語表現力【資料】	授業内容を文字に起こした。	図や表、フローチャートに起こした。	相手が授業内容を十分に理解できる資料を作成した。	／3
	④ 言語表現力【発表】	授業内容を言葉に起こした。	図や表、フローチャートなどを活用し、授業内容を自分の言葉に起こした。	相手が授業内容を十分に理解できる発表をした。	／3
Yomu ～読む力～	⑤ 先を読む力	先を読み、ゴール（仮説）を設定した。	設定したゴール（仮説）に向けてのアプローチの仕方を先読みした。	先読みしたゴール（仮説）とアプローチの仕方が適切に検証し、必要に応じてゴール（仮説）を再設定した。	／3
	⑥ 読解力 (情報収集力)	文章や図表、データを読み取った。	■読み取った文章を解読し、要約した。 ■図表やデータを分析し、整	読み取った文章や図表、データを解読し、自分の意見を持つことができた。	

として、探究学習の重要性が教師間で共通理解することができてきたと感じています」（進路指導部長・山中資基先生^{もとき}）

同僚との対話が探究学習の見取りを豊かにする

教師が探究学習を自分事化する上で、授業の互見や校内研修が大きな役割を果たしていると谷地先生は語る。

「23年度から県内外に向けて、教科等横断型授業や探究型授業の公開授業を実施しています。また、24年度は『生徒が主役の授業の実現』『業務の精選・深化』といったテーマで、全教師対象の研修を実施しました。研修は教師同士の対話を重視したワークショップ型にしましたが、そうすることで、答えが1つではない探究学習に取り組む生徒の学びを教師が追体験することができないのではないかと考えたからです」

山中先生は、校内研修は教師の資質・能力の向上にもつながっていると考えている。

「研修で自分の悩みを話したり、同僚の思いを聞いたりする中で、私たちは他者の言葉を粘り強く待ち、自分とは異なる価値観を受け止めます。そうした経験は、生徒の探究学習に伴走する際に、『生徒の思いをもっと聞いてみた方がよいのではないだろうか』といった気づきにつながります」（山中先生）

ワークショップ型の研修を行った後は、職員

室内での教師間のコミュニケーションが明らかに活発化すると谷地先生は語る。

「以前は本校においても、SSHや探究学習は一部の教師が担当するものだという雰囲気がありました。しかし今は、教科や分掌を超えた教育活動であると全教師が認識していますし、探究学習に関する業務が突発的に発生しても、『探究学習は学校全体で進めるものだから』と、同僚たちが積極的にかかわってくれます」

同校の生徒は、「先生たちがルーブリックを意識して授業を進めてくれているので、教科学習と探究学習の2つの面で、自分の成長や課題を捉えることができています」「どの先生も自分たちの探究学習に興味を持っていて、教科の授業でしか接点のない先生が、授業後に『探究学習の参考になるかも』と、大学教授の論文を紹介してくれたこともある」などと、探究学習に対する教師の当事者意識の高さを語る。

探究学習を教師が自分事化しにくい理由として谷地先生は、「探究学習が生徒主体の学びであること」「探究学習の成果を数値などで見ることが難しいこと」を挙げる。

「だからこそ探究学習に取り組む生徒に伴走するためには、生徒の中で資質・能力がどのように育まれているのかを見取る力が、私たち教師に求められるのです。数値化しにくい生徒の変化を見逃さず、『〇〇力が伸びたな』などと気づくことができれば、教師も探究学習を自分事化することができると思います」（谷地先生）